115學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第九期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(05)
講題：在日本看見明朝

何國慶

(2026.10.15)

摘要

本演講主題為「在日本看見明朝」，主講人何創時書法藝術基金會何國慶董事長，從歷史人物、佛教傳播、思想文化、書畫藝術及生活習俗等面向，探討明代文化在日本的傳承與發展。講者透過豐富的歷史文獻、書畫作品與日本現存文化及古蹟，帶領學生重新認識明清之際東亞文化交流的歷史脈絡，說明明代文化如何跨越地域與時代，在日本社會持續發揮深遠影響。。

首先，講者先講述基金會在今年10月於大阪市立美術館開館90周年之際開展以及介紹九州佐賀的多久聖廟，是日本現存最古老的孔廟之一，接著介紹明末高僧隱元隆琦赴日弘法的歷史。1654年，63歲的隱元應邀東渡日本，並於1661年在京都宇治創建萬福寺，開創日本黃檗宗。萬福寺保存明代建築、雕刻與佛教儀式等文化特色，成為日本認識明代文化的重要場所。隱元不僅將明代佛教思想與修行制度傳入日本，其《黃檗清規》亦對日本禪宗改革產生影響。此外，黃檗宗至今仍保留以黃檗唐音誦經的傳統，展現明代佛教文化在日本延續的特色。

在生活文化方面，隱元將明代福建的飲茶文化與素食料理傳入日本，促成煎茶道及普茶料理的發展，也對日本飲食習慣產生影響。書畫藝術方面，隱元與弟子木庵性瑫、即非如一並稱「黃檗三筆」，以雄渾有力的書法風格影響江戶時代的書壇。隱元門下人才輩出，鐵眼道光完成《大藏經》6,771卷的刊刻，促進佛教經典的流通；鐵牛道機則投入圍海造田工程，顯示黃檗僧侶的貢獻已從宗教延伸至出版、社會建設與民生領域。

其次，講者介紹多位明代赴日人物的文化貢獻。默子如定將明代造橋技術引入長崎，參與建造著名的眼鏡橋；東皐心越則對日本琴學、篆刻及書法藝術的發展產生重要影響。陳元贇除了傳授武術、影響日本柔術的發展，也將製陶技術及明代公安派文學介紹至日本，其製陶作品被稱為「元贇燒」。這些人物不僅促進中日文化交流，更使明代的藝術、技術與思想融入日本社會。

在儒學思想方面，講者特別介紹被譽為「日本的孔子」的朱舜水。朱舜水赴日後受到德川光圀禮遇，其思想對日本近世儒學、水戶學及教育文化具有重要影

響。他重視實踐、經世致用、社會教育與歷史研究，並將明代禮制、建築及園林文化介紹至日本。東京小石川後樂園的中國式造景，即可見其文化影響。此外，王陽明所倡導的「致良知」與「知行合一」，以及袁了凡《了凡四訓》強調積善改命的思想，也在日本受到重視，並對近現代知識界及企業倫理產生啟發。

最後，何國慶董事長指出，明代文化並未隨著明朝滅亡而消失，而是透過僧侶、儒者、藝術家及工匠的跨海交流，在日本獲得保存、發展與轉化。從京都萬福寺、長崎眼鏡橋、尾張(名古屋)藩初代藩主德川義直的「源敬公廟」、東京的後樂園等文化遺跡到各地書畫文物，皆可看見明代文化留下的歷史印記。本場講座透過宗教、思想、藝術與生活文化的多元視角，呈現東亞文明相互交流、融合與創新的歷史歷程，也使學生進一步理解日本文化發展與東亞文化交流之間密不可分的關係，為探索「亞洲共同體」與東亞學研究提供新的思考方向。

徐興慶 整理

2026.10.16

115 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第九期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(05)
講題：日本で見る明朝

何国慶

(2026.10.15)

要旨

「日本に見る明朝文化」

本講演は、「日本に見る明朝文化」をテーマに、何創時書法芸術基金会の何国慶理事長を講師に迎え、歴史上の人物、仏教の伝播、思想文化、書画芸術、生活習俗など、多角的な視点から、明代文化が日本においていかに継承され、発展してきたのかを考察するものであった。講師は、豊富な歴史文献や書画作品、日本に現存する文化遺産や史跡を紹介しながら、明清交替期における東アジア文化交流の歴史的背景を学生たちにわかりやすく解説し、明代文化が地域や時代の枠を越えて、日本社会にいかに深い影響を及ぼし続けてきたのかを明らかにした。

まずは、本年 10 月に大阪市立美術館の開館 90 周年を記念して開催された展覧会における同基金会の取り組みを紹介するとともに、佐賀県多久市にある多久聖廟について説明した。多久聖廟は、日本に現存する孔子廟のなかでも、歴史的に重要な建造物の一つである。続いて、明末の高僧・隠元隆琦が日本に渡り、仏教の布教に尽力した歴史を取り上げた。

1654 年、63 歳の隠元隆琦は招聘を受けて渡日し、1661 年には京都府宇治に萬福寺を創建して、日本黄檗宗を開いた。萬福寺には、明代の建築様式、彫刻、仏教儀礼などの文化的特色が今日まで保存されており、日本において明代文化を理解するうえで重要な場所となっている。隠元は、明代の仏教思想や修行制度を日本に伝えただけでなく、その著書『黄檗清規』を通じて、日本の禅宗改革にも影響を与えた。また、黄檗宗では現在も黄檗唐音による読経の伝統が受け継がれており、明代仏教文化が日本において継承されてきた特色を示している。

生活文化の面では、隠元が明代福建地方の喫茶文化や精進料理を日本に伝え、煎茶道や普茶料理の発展を促すとともに、日本の食文化にも影響を与えたことが紹介された。書画芸術の分野では、隠元とその弟子である木庵性瑫、即非如一が「黄檗三筆」と称され、その力強く雄渾な書風が江戸時代の書壇に大きな影響を及ぼしたことが説明された。

さらに、隠元の門下からは多くの優れた人材が輩出された。鉄眼道光は、全6,771巻に及ぶ『大蔵経』の刊刻を成し遂げ、仏教経典の流通と普及に貢献した。また、鉄牛道機は干拓事業に取り組み、沿岸部の土地造成と農地開発に尽力した。これらの事例は、黄檗僧の活動が宗教の領域にとどまらず、出版事業、社会基盤の整備、さらには民生の向上にまで及んでいたことを示している。

次は、明代に日本へ渡ったさまざまな人物の文化的貢献について紹介した。默子如定は、明代の架橋技術を長崎に伝え、著名な眼鏡橋の建設に携わった人物として知られている。また、東皐心越は、日本における琴学、篆刻、書道芸術の発展に重要な影響を与えた。陳元贇は、武術を伝授して日本柔術の発展に影響を及ぼしたほか、陶芸技術や明代の公安派文学を日本に紹介した人物でもある。彼の作陶に由来する作品は「元贇焼」と称されている。これらの渡日人物は、日中文化交流を促進しただけでなく、明代の芸術、技術、思想を日本社会に浸透させ、その文化的発展に寄与したのである。

儒学思想の分野では、特に「日本の孔子」とも称される朱舜水について詳しく紹介した。朱舜水は渡日後、徳川光圀から厚遇を受け、その思想は日本近世儒学、水戸学、さらには教育文化の発展に重要な影響を与えた。朱舜水は実践を重んじ、経世致用の精神、社会教育、歴史研究を重視するとともに、明代の礼制、建築、庭園文化などを日本に紹介した。東京の小石川後楽園に見られる中国風の庭園景観にも、その文化的影響の一端をうかがうことができる。さらに、王陽明が提唱した「致良知」や「知行合一」の思想、ならびに袁了凡の『了凡四訓』に説かれた善行の積み重ねによって運命を変えるという思想も、日本において重視され、近現代の知識人や企業倫理の形成に示唆を与えてきたことが紹介された。

最後に、何理事長は、明代文化が明朝の滅亡とともに消滅したわけではなく、僧侶、儒者、芸術家、職人たちによる海を越えた交流を通じて、日本において保存され、発展し、新たな文化的変容を遂げてきたことを強調した。京都の萬

福寺、長崎の眼鏡橋、尾張藩（名古屋）初代藩主・徳川義直を祀る源敬公廟、東京の小石川後楽園などの文化遺産をはじめ、日本各地に伝わる書画や文物には、明代文化の歴史的足跡が今なお色濃く残されている。

本講演は、宗教、思想、芸術、生活文化という多様な視点から、東アジア諸地域の文明が相互に交流し、融合と創造を重ねてきた歴史的過程を明らかにするものであった。また、学生たちにとっても、日本文化の形成と発展が東アジアにおける文化交流と密接に結びついていることを再認識する貴重な機会となった。とりわけ、明代文化が日本において単に保存・継承されただけでなく、日本社会の歴史的・文化的環境のなかで受容され、新たな意味を付与されながら発展してきたという視点は、東アジア文明の相互作用を理解するうえで重要な示唆を与えるものである。また本講演は、「アジア共同体」の可能性や東アジア学研究の今後の展開を考えるうえでも、新たな視座を提供するものとなった。

キーワード：東アジア文明、明朝、隠元隆琦、朱舜水、日中文化交流

中国語要旨・まとめ 徐興慶

日本語翻訳 徐興慶

2026.10.16